

2008

地歴最新資料

第8号 (2008年1月12日現在)

INDEX

2007年5月～2008年1月のおもなできごと・TOPIC! 2

日本史

- ①ベニバナの発見 3
- ②藤原宮跡での発掘成果 3
- ③本能寺跡での発掘成果 4
- ④坂上田村麻呂の墓の特定 4
- ⑤高松塚古墳・キトラ古墳の修復保存状況 5

世界史

- 特集** 「モンゴル時代史」の研究状況について 6
〈第一学習社『改訂版 世界史A』教科書著者〉
京都府立嵯峨野高等学校：川口 靖夫 教諭
- ⑥2008年アメリカ大統領選挙スタート 8
- ⑦混乱が続くパキスタン 9

地理

- 海外トピック**
- ロングステイの紹介と現状 10
埼玉県立所沢高等学校：渡辺 美久 教諭



第一学習社

2007年5月～2008年1月のおもなできごと

(注)○内の数字は月を示す。

下線部①～⑦は解説の掲載を示す。敬称略。

政治	社会・文化	国際情勢
⑤ 14日、国民投票法成立。 ⑤ 28日、松岡利勝農林水産大臣が議員宿舎で自殺。 ⑥ 20日、改正イラク復興支援特別措置法、教育関連3法成立。 ⑦ 29日、参議院議員通常選挙が投開票。自民党が大敗し、民主党が大躍進。 ⑧ 27日、安倍改造内閣発足。 ⑨ 12日、安倍首相が突然の辞任表明。 ⑨ 25日、自民党総裁の福田康夫が首相就任。26日、新内閣発足。 ⑩ 1日、テロ対策特別措置法の期限切れに伴い、海上自衛隊がインド洋から撤収。 ⑩ 2日、福田首相は、民主党の小沢代表との会談で、連立政権への参加を打診。民主党は連立を拒否。 ⑩ 28日、守屋前防衛事務次官とその妻を収賄容疑で逮捕。 ⑫ 28日、北京で日中首脳会談開催。 ① 11日、葉書肝炎被害者救済特別措置法成立。 ① 11日、新テロ対策特別措置法成立。	⑥ 3日、④京都市山科区の西野山古墓が、坂上田村麻呂の墓である可能性が高いことが判明。 ⑥ 28日、世界遺産委員会は、「石見銀山遺跡とその文化的景観」(島根県)の世界文化遺産への登録を決定。 ⑧ 7日、③京都市中京区の旧本能寺跡の調査で、本能寺の変の遺物とみられる瓦などが見つかったことが判明。 ⑧ 21日、⑤奈良県明日香村の高松塚古墳で、石室の解体作業が終了。 ⑨ 29日、沖縄戦で日本軍が住民に「集団自決」を強制したとの記述が教科書検定で削除された問題で、検定意見の撤回を求める県民大会が、沖縄県宜野湾市で開催。 ⑩ 2日、①奈良県の桜井市教育委員会が、纏向遺跡で、3世紀中頃の溝跡から大量のベニバナ花粉が見つかったと発表。 ⑩ 29日、②奈良文化財研究所が、奈良県橿原市の藤原宮跡で、最古の地鎮祭跡が見つかったと発表。	⑤ 6日、フランス大統領選挙の決選投票の結果、サルコジが当選。 ⑥ 27日、イギリスで、労働党のブラウンが首相就任。 ⑩ 2日、韓国の盧武鉉大統領が北朝鮮のピョンヤンで金正日総書記と会談。 ⑩ 6日、⑦パキスタン大統領選挙で現職のムシャラフが圧勝。 ⑪ 24日、オーストラリア総選挙で、野党の労働党が圧勝。12月、ラッドが首相就任。 ⑫ 3日、国連気候変動枠組条約第13回締約国会議(COP13)が、インドネシアのバリ島で180か国以上が参加して開会。 ⑫ 10日、アメリカのゴア元副大統領と国連の「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)がノーベル平和賞を受賞。 ⑫ 19日、韓国大統領選挙で、最大野党ハンナラ党の李明博が当選。 ⑫ 27日、⑦パキスタンのブットー元首相が暗殺される。 ① 1日、キプロスとマルタがEU(欧州連合)の統一通貨ユーロを導入。 ① 3日、⑥アメリカ大統領選挙がアイオワ州の党員集会から始まる。

TOPIC!

●朝河貫一記念庭園完成、早稲田大学の大隈記念講堂が重要文化財指定 日本史

2007年10月12日、アメリカ・コネティカット州のエル大学構内に、同大学の元教授で歴史学者の朝河貫一の業績を記念した庭園が完成した。朝河貫一(1873～1948)は福島県二本松市の出身で、東京専門学校(現在の早稲田大学)に学び、その後渡米し、エル大学で日本史を教えた。日本のアジア政策を批判、日米開戦回避にも努力した。2007年は、朝河貫一がエル大学で教職についてから100年目にあたり、日米友好のシンボルとして庭園が造成された。なお、2007年は朝河貫一が学んだ早稲田大学が創立125周年を迎えた。この記念の年に、創設者大隈重信を記念して建設された同大学内の大隈記念講堂(1927年竣工)が、重要文化財に指定された。参照『日本史A』(p.113)、『最新日本史図表』(p.274)

●イラク戦争開戦以降のイラク人死者15万人に 世界史

2008年1月9日、世界保健機関(WHO)が、イラク戦争開戦から約3年間で暴力行為により死亡したイラク人の死者が推計15万1,000人に達したとする調査結果を発表した。死者数に関する公的機関による大規模調査は今回が初めてとなる。イラク全土の9,345世帯に対する聞き取り調査に基づく推計で、2003年3月～2006年6月の期間の、自爆テロやシーア派とスンナ派の宗派対立による武力抗争、米軍の攻撃などの暴力行為に伴う死者数とされる。WHOは、戦闘員と非戦闘員の区別はないが、死者の大半は民間人とみられるとしている。イラクの治安情勢は、依然厳しい状況が続いている。

●イギリス、原子力発電所の新設を認める法案を提出 地理

2008年1月10日、イギリス政府は「脱原発」政策を変更して、原発新設を認める法案を下院に提出した。チェルノブイリ原子力発電所の事故以来、イギリスでは約20年間にわたり新規の原発は1基しか建設されておらず、「脱原発」政策がとられていた。現在、19基の原発が運転しているが、老朽化が進み閉鎖が見込まれる中で、原子力発電は将来的にも必要との判断のもと、ブレア政権時の2006年に新規建設促進に方向転換したが、環境保護団体から訴訟がおこされ実現されずにいた。今回の法案についても反対の声が上がっているが、野党の保守党も基本的に賛成しており、早期の法案の成立をめざしている。

解説 1

ベニバナの発見

●^{まきむく}纏向遺跡での発掘成果

奈良県桜井市の纏向遺跡で、3世紀中頃の溝跡から織物の染料とみられるベニバナの花粉が大量に見つかった(2007年10月、桜井市教育委員会発表)。ベニバナはエジプトが原産で、渡来人が染色技術とともに伝えたと考えられる。纏向遺跡では、1991(平成3)年に発掘調査がおこなわれ、3本の溝跡が見つかった。この溝跡の堆積土を分析した結果、ベニバナの花粉が確認された。他の植物をあわせた検出花粉の約1%の量で、これは一面がベニバナ畑になるほどの量であると思われる。国内の検出例としては、これまで6世紀の藤ノ木古墳(奈良県斑鳩町)のものが最古であったが、今回の発見は、これを300年ほどさかのぼる結果となった。

纏向遺跡は、邪馬台国の有力候補地とも考えられる遺跡。『魏志倭人伝』には、243年に邪馬台国の女王卑弥呼が、赤や青で染めた絹織物を魏に献上したとある。この当時の他の遺跡からはベニバナは見つかっていないことから、外交によって直接入手した可能性も指摘される。今回の発見は、纏向遺跡の先進性を裏付けることにもなり、また「纏

向遺跡＝宮都論」の根拠となるとの見解もある。

●^{さかふねいし}酒船石遺跡での発掘成果

奈良県明日香村の酒船石遺跡で、水路の堆積土からベニバナの花粉が大量に検出されたことがわかった(2007年10月)。酒船石遺跡は、亀形・小判形の石槽を配置した石敷広場を持ち、谷の湧き水を使った祭りの場と考えられる遺跡である。ベニバナは染織に用いられるほか、殺菌や防腐効果もあるとされる。酒船石遺跡は周辺を尾根に囲まれた閉鎖的な場所にある。今回確認されたベニバナは、他の場所から流れ込んだものとは考えにくく、みそぎの儀式に用いられたものではないかとの見方もある。

参照 『最新日本史図表』(前見返し裏, p.5, 26, 28), 『新編日本史図表』(前見返し, 折込, p.29)

解説 2

藤原宮跡での発掘成果

●地鎮祭跡の発掘

奈良県橿原市の藤原宮跡で、日本最古の貨幣である富本銭と水晶が入ったつぼが出土した(2007年11月、奈良文化財研究所発表)。つぼが出土したのは宮の中心だった大極殿を取り囲む回廊跡で、つぼの周囲約1メートル四方に四つの柱穴も見つかった。宮殿建設の無事を祈る地鎮祭の跡と見られ、宮殿にかかわる地鎮遺構としては最古のものである。つぼは、高さ約14センチ直径約20センチで、ほぼ完全な状態で出土した。つぼの口は狭く、富本銭と土でふさがれており、CTスキャナーで内部を調べた結果、内部には六角柱状の水晶があることがわかった。富本銭・水晶とも9点ずつあった。「9」は陰陽道では最高の数字とされるため、地鎮祭は陰陽道に従って執行されたのではないかとの見方もある。『日本書紀』には、持統天皇が692(持統天皇6)年に「藤原の宮地(みやどころ)を鎮め祭らしむ」とあり、今回の発見は、この記述を裏付けるものと考えられる。

●大極殿付近の発掘

2007年の藤原宮跡の発掘調査では、大極殿院の正門である南門の土台にある基壇(9月)、運河跡(10月)などの遺構が相次いで見つかった(いずれも奈良文化財研究所発表)。基壇は、従来の推定を上回る東西39メートル南北14メートルで、南北に取り付けられた幅25メートルの階段跡も見つかった。今回の調査によって、南門は東西35メートル南北10メートルと、国内最大級の規模であったと推定される。運河は、木材や礎石など宮の造営のための資材を運ぶためのもので、資材を運んだ後に埋め立てられたと見られる。運河跡は、これまで大極殿の北側で確認されているが、今回の調査では、運河は、南門を越えて役人が儀式をおこなう朝堂院まで延びていることがわかった。また、運河が大極殿だけでなく、藤原宮の中核施設の建設にかかわる資材の運搬にも使われていたことが明らかとなった。

参照 『最新日本史図表』(前見返し, p.42, 43), 『新編日本史図表』(p.29)



解説 3

本能寺跡での発掘成果

1582(天正10)年の本能寺の変によって焼失した旧本能寺跡の発掘調査がおこなわれ、石垣を積んだ堀跡や大量の焼け瓦・焼け土などが出土した(2007年8月)。京都市中京区の旧本能寺の跡地は、現在はそのほとんどが宅地などになっており、空き地となっている一部分の約130平方メートルの土地が限られた発掘調査の場所となっていた。

発掘調査は、2007年7月上旬から関西文化財調査会が中心となっておこなわれた。堀跡は長さ約20メートル幅約6メートルのL字形で、高さ1メートルの石垣で護岸されていた。大量の瓦はこの堀跡から見つかった。本能寺の変によると見られる焼け瓦のほか、本能寺をあらわす文字を書いた丸瓦もあり、本能寺の瓦であることが裏付けられた。本能寺の変を直接示す遺構・遺物としては初めてのものであり、また、本能寺が堀と石垣という城郭の性格をもった施設であったことも明らかとなった。織田信長がまったく無防備の状態で明智光秀の襲撃を受けたという、本能寺の変に対するこれまでの定説を覆す発見という見方もある。

なお、2007年6月から、織田信長の居館があったとされる岐阜市では、本格的な発掘調査が始まった。居館跡は岐阜市内の岐阜公園内にあり、岐阜城千畳敷(せんじょうじき)遺跡とよばれる。宣教師ルイス=フロイスが、その著書『日本史』のなかで「華麗なる宮殿」と称し、内部の様子を紹介している。これまでの調査では、板状の巨石を並べた通路が確認されている。

用語解説

■本能寺

1415(応永22)年に日隆によって創建された法華宗寺院。油小路高辻にあったが、たびたび火災にあい移動。1536(天文5)年の天文法華(てんぶんほっけ)の乱によって焼かれ堺に移ったが、のち京都に戻った。四条坊門西洞院にあった1582(天正10)年に本能寺の変がおこり、伽藍は焼失した。その後、豊臣秀吉の命によって現在の地(中京区寺町通御池下ル)に移った。

参照『最新日本史図表』(p.124)、『新編日本史図表』(p.101)

解説 4

坂上田村麻呂の墓の特定

1919(大正8)年に、京都市山科区で発掘された西野山古墓(にしのやまこぼ)が、平安時代の武将坂上田村麻呂の墓である可能性がきわめて高いことがわかった(2007年6月発表)。京都大学准教授の吉川真司氏の文献調査による。田村麻呂が創建したとされる清水寺(京都市東山区)に残る平安時代後期に編纂された『清水寺縁起』におさめられた811(弘仁2)年10月の太政官符の表題部分には、田村麻呂の墓所として「山城国宇治郡七条昨田西里栗栖水の水田、畑、山を与える」という文言がある。山城国宇治郡は現在の京都市山科区一帯で、これを同区の条里制地図と照合すると現在の西野山古墓の場所と一致する。

西野山古墓は、清水寺の南東約2キロの山科盆地西部の山の斜面、東山区の泉涌寺近くから山科に抜ける古道沿いにある。1919年の調査では、周囲を木炭で覆った木棺墓が見つかり、純金の装飾を施した大刀や金銀の鏡など、豪華な副葬品が出土した。これらの遺物は、正倉院宝物に匹敵するともいわれるもので、1953(昭和28)年、「山科西野山古墳出土品」として国宝に指定された。現在は、京都大学総合博物館に所蔵されている。現在、西野山古墓の南東

1.5キロのところに田村麻呂の墓とされる遺跡があるが、考古学的根拠は弱いといわれる。

用語解説

■山科西野山古墳出土品

墓は、木棺の周囲全体を木炭で厚く充填するという上流階層にのみ採用される特殊な構造をもち、墓のなかからは、金装大刀、金銀平脱双鳳文鏡などの質の高い副葬品がまとまって出土した。金銀で装飾された古代の刀剣としては正倉院に伝わる「金銀鍔唐大刀」が知られるが、正倉院の大刀の金具類は銀製で鍍金(金メッキ)であるのに対し、西野山古墓の金装大刀は純金製である。その他、革帯につけられていた白色の飾石や金銀なども出土している。とくに白色の飾石は、『日本紀略』『延喜式』などに見られる「白玉帯(はくぎょくたい)」に相当する可能性が高く、これは参議以上のみ許されたものとされる。

参照『最新日本史図表』(p.66)、『新編日本史図表』(p.49)

高松塚古墳・キトラ古墳の修復保存状況

●高松塚古墳壁画の修復保存状況

▶地歴最新資料第7号

2007年4月から石室の解体作業がおこなわれていた奈良県明日香村の高松塚古墳では、同年6月、天井石・壁石計12枚を取り外し、すべての壁画の取り外しを終了。8月には、残った床石4枚を取り外し、石室解体作業は終了した。取り外された石は、高松塚古墳近くの修復施設に運ばれ、汚れの除去や消毒などがおこなわれている。壁画の修復は、10年ほどかけておこなわれる見通しである。壁画の具体的な修復方針や保存方法についてはいまだ決まっておらず、今後は、劣化の検証を含めて、対策が検討される。

解体が進められるなかで、新たな発見もあった。「飛鳥美人」とよばれる女子群像が描かれた西壁と天井石の間には、隙間なく塗られたしっくいほぼ完全な状態で残っていた。西壁は、壁画発見当初、もっとも保存状態がよかった壁画で、このしっくいが雨水や泥の流入を防ぎ、壁画を守ったと考えられる。しかし、現在、この女子群像の顔にはカビが広がっている。床石には赤い顔料が3箇所に着していた。分析の結果、朱色の主成分である水銀が検出された。これは、女子群像の唇や衣装の一部、四神図「白虎」のつめなど、石室に描かれた壁画の彩色に使った顔料と同じものと見られることから、壁画を描いた人物がパレット代わりにした皿から落したのではないかと、この見方もある。

高松塚古墳では、解体作業を終えた後、保管していた土を使った墳丘の埋め戻しもおこなわれた。今後、数年をかけて築造当初の姿に復元される予定となっている。

●キトラ古墳壁画の修復保存状況

奈良県明日香村のキトラ古墳では、2007年2月までに石室内に描かれた四神図や十二支図のはぎ取りがおこなわれ、あとは天井に描かれた天文図(星宿)を残すのみとなった。天文図については、劣化が激しく、まとめてはがすことが技術的に難しいため、分割してはぎ取る方針が決定していたが、作業の見通しはたっていなかった。しかし、2007年7月に天文図の一部がしっくいごとにはがれ落ちていることが判明、その後の点検でも、下地であるしっくい層の状態が悪く、はがれ落ちる危険がある個所が確認された。そのため、7月以降、数度にわたって部分的なはぎ取り作業が進められている。はぎ取り作業は、2009年3月までに終了する予定となっている。当初は、刃の部分にステンレス板を用いた新型カッターを使う方針であったが、しっくいを傷める恐れもあることから、へらを使った作業に変更される。生物被害が進み、作業が急を要することもあり、新型カッターの準備が間に合わないことも理由の一つとなっている。

なお、はぎ取られた壁画のうち、十二支図「子・丑・寅」が、2008年5月9日～25日の予定で、明日香村の奈良文化財研究所飛鳥資料館で一般公開される。参照『最新日本史図表』(前見返し, p.47), 『新編日本史図表』(前見返し, p.36)

◆高松塚古墳壁画修復・保存の経緯

1972年	壁画を発見
1973年	古墳全体を特別史跡に指定 現地保存方針決定
1974年	保存施設完成。石室を密閉
1981年	年1回の定期点検開始(～2001年)
2001年	石室入口でカビ発見。石室開封、石室内でカビ発見
2002年	壁画(女子群像周辺)でカビ発見
2004年	文化庁に国宝高松塚古墳壁画恒久保存 対策検討会を設置 写真集『国宝高松塚古墳壁画』刊行、壁 画劣化が報道 壁画(男子群像・四神周辺)でカビ発見 発掘調査開始(～2005年)
2005年	石室を解体し、壁画を墳丘外で修復する 方針が決定
2007年4月	石室の解体作業開始
6月	すべての壁画の取り外し終了(天井 石・壁石計12枚)
8月	床石4枚の取り外し終了<石室解体 作業終了>
9月	発掘調査終了

解説①～⑤に関連するホームページのURL

奈良文化財研究所◆<http://www.nabunken.go.jp/topics/index.html>

ホームページで、藤原宮大極殿南門の調査に関する現地説明会資料の情報などを提供。

現在、世界史A・B併せて9社30冊の教科書が出版されているが、教科書の採択シーズンになると、比較検討してみることがある。すると、時折、新たな発見がある。最近、気がついたことといえば、某教科書で南宋の滅亡年代が、1279年から1276年が変わっていたことである。1276年滅亡説は古くからあり、さほど驚くに足らないことではあるが、最近のモンゴル帝国に関する記述の変化には目を見張るものがある。近年、「モンゴル時代史」の研究が飛躍的に進展し、その研究成果が、徐々にではあるが、教科書の記述に反映されてきたということであろうか。

研究者の中でも、特に杉山正明は「モンゴル時代」というスケールの大きいユーラシア規模の歴史を単行本の形で公開し、その記述が極めて刺激的で説得力もあり、時に挑発的ですからあることから、その影響力は極めて大きいように思う。今のところ、モンゴル時代の全体像を提示した概説書で杉山正明の一連の著作に比肩されるものは見受けられない。「杉山パラダイム」という評がある所以である(「2001年の歴史学界―回顧と展望―」『史学雑誌』111編5号, 2002)。その「杉山パラダイム」をもとに、教科書から消えつつある「モンゴル人第一主義(モンゴル至上主義)」及び「オゴタイ=ハン国」について簡単に触れてみたい。なお、用語の表記は混乱を避けるため、便宜上、教科書で一般的に使用されている表記を使用する。

1 モンゴル人第一主義(モンゴル至上主義)について

従来、元の中国支配は、支配領域内の人々をモンゴル人・色目人(西域出身諸民族)・漢人(金の支配下にあった人々)・南人(南宋の支配下にあった人々)の4つの身分(あるいは階級)に大別し、任官・刑罰・科挙・禁令・賦役など様々な面において、民族差別を利用した政策をとり、モンゴル人・色目人を支配者階級、漢人・南人を被支配者階級とする「モンゴル人第一主義(モンゴル至上主義)」を特色とすると記述されてきた。

元治下の人々を4つの身分に分けることを最初に主張したのは、箭内互である。箭内は「元代社会の三階級」(1916)(『蒙古史研究』所収, 刀江書院, 1930)において、元はモンゴル人・色目人・漢人(漢人と南人を含む)の三階級に分け、差別的な政策を実施したと主張し、続いて、羽田亨が「元朝の漢文明に対する態度」(1928)及び「宋元時代総説」(1935)(『羽田博士史学論文集 上巻歴史編』所収, 東洋史研究会, 1957)において、「四階級制」に基づく「蒙古至上主義」を唱え、以後、多くの研究者が踏襲する中で通説とな

り、定着していった。

この「四階級制」に対して、杉山正明は、限りなく誤解に近く、「中国史家の創造である」と言い切る(「モンゴル世界帝国の成立」『アジアの歴史と文化7』所収, 同朋舎, 1999)。森田憲司も否定的な見解を示し、モンゴル人以外であっても高位高官に登用される実態を「根脚」という視点から説明する(「元」『中国の歴史 下』所収, 昭和堂, 2005)。「根脚」とは、民族とは関係なく、モンゴル帝室との個人的な結びつきをいい、その強弱によって、優遇されることをいう。船田善之は「元朝治下の色目人について」(『史学雑誌』108編9号, 1999)において、漢語以外で記されたモンゴル帝国関係の一次史料(非漢語史料)に「色目人」あるいはそれに相当する語は存在せず、「色目人」という概念は漢族によって創出されたものとし、「四階級制」説の再検討の必要性を指摘した。

モンゴル帝国の特徴は、人種、民族、文明、言語、宗教などの違いによって人を区別することが稀薄であり、集団であれ個人であれ、有能であれば自分たちの中へ取り込んでいったことである。例えば、軍閥の代表格の史天沢は、漢人でありながら「勇者」の称号とともにモンゴルと認定され、中書右丞相という最高官位に就いている。また、史天沢の従孫の史燿が福建省の長官に任命されようとしたとき、史燿は自分が漢人であることを理由に固辞し、フビライの側近もまた、行省の長官はモンゴル人を当てるように願った。そのとき、フビライは「大尉(=史天沢)を漢人とみなすなどとはもってのほかじゃ。だとすれば、その孫を国人(=モンゴル)とみなさずしてなんとする」と答えたという(愛宕松男・寺田隆信『モンゴルと大明帝国』講談社学術文庫, 1998)。

以上の研究状況を踏まえると、「モンゴル人第一主義」という概念は極めて不安定であり、従来の教科書には必ずといっていいほど記述があったが、最近では、教科書から消えつつあるのである。

補足ながら、元代の儒者知識人が冷遇された例としてよく引用される俚諺に「九儒十丐」というのがある。その出典は、鄭思肖の『鉄函心史』に「一官、二吏、三僧、四道、五医、六工、七獵、八娼、九儒、十丐」とあり、同時期の謝枋得の『疊山集』に「人に十等あり。一官、二吏、これを先んずるは、これを貴ぶなり。これを貴ぶは、国に益あるを謂うなり。七匠、八娼、九儒、十丐、これを後にするは、これを賤むなり。これを賤むは、国に益なきを謂うなり。

嗟呼、卑しいかな、娼の下、丐の上に介するは、今の儒者なり」(岩村忍『東洋史の散歩』新潮選書、1970)とある。しかし、鄭思肖も謝枋得も共に元には仕えず、民族意識の強い人物であり、反モンゴル・スローガン、あるいは自嘲としての側面を否定できず、現在では、それが現実をどの程度反映しているか疑問視されている(森田憲司「元代の社会と文化」『世界歴史体系 中国史3—五代—元—』所収、山川出版社、1997)。

2 「オゴタイ=ハン国」について

教科書の記述では「ハン国」という表記が一般的であるが、概説書や研究論文では「ハン国」という表記は使用されず、「ウルス」という用語が一般的である。この「ウルス」を「ハン国」と訳したことから混乱が生じた。「オゴタイ=ハン国」・「チャガタイ=ハン国」という用語は、当時の史料に見える「オゴタイのウルス」・「チャガタイのウルス」から想定されたものである。この「ウルス」とは、本来、遊牧民の集団、またはその集団の遊牧地域をさす言葉であり、領域が移動することも可能という、われわれが抱く国家概念(国民国家)とは程遠い国家である。杉山正明は、国民国家を「固い国家」、遊牧国家を「柔かい国家」と表現する(『中国の歴史08 疾駆する草原の征服者』講談社、2005)。

チンギス=ハンは、即位後まもなく1207年から11年にかけて、モンゴル高原の西方アルタイ山脈方面に、長子ジュチ、次子チャガタイ、第三子オゴタイ、東方大興安嶺方面に、次弟カサル、第三弟カチウン(分封当時すでに他界)の嗣子アルチダイ、末弟オッチギンに遊牧民と遊牧地を分け与えた。ここにチンギス=ハン自らが統率するモンゴル高原に「中央ウルス」、東西に左右対称に六ウルスが誕生した。モンゴル帝国史の展開を語る際に、西方の諸子ウルスのみに重きが置かれたが、東方の諸弟ウルスも対等であり、ここにモンゴル帝国の原像を見出したのが、杉山正明の学界デビュー論文「モンゴル帝国の原像—チンギス・カンの一族分封をめぐる—」(『東洋史研究』37巻1号、1978)である。

このとき、オゴタイ=ウルス(オゴタイ=ハン国)は成立し、第3代グユクが死去するまで存在した。以下、オゴタイ=ハン国の動向について、村岡倫「カイドゥと中央アジア—タラスのクリルタイをめぐる—」(『東洋史苑』30・31合併号、1988)・「オゴタイ=ウルスの分立」(『東洋史苑』39号、1992)をもとに簡述する。

グユクが死去すると情勢は一変する(グユクは、バトゥが放った刺客により暗殺されたという)。グユク死後、ジュチ家の当主バトゥは、トゥルイ家のモンケを擁立したが、オゴタイ家一門は不満をもち、モンケの暗殺を企てたが失敗した。モンケは即位すると、自分の即位に反対したオゴタイ家及びオゴタイ家と結んでいたチャガタイ家に対

し徹底した報復を行った。オゴタイ家の所領は細分化され、チャガタイ家の所領もジュチ家のバトゥとトゥルイ家のモンケによって分割され、ここにオゴタイ=ハン国とチャガタイ=ハン国は実態をなくしてしまう。

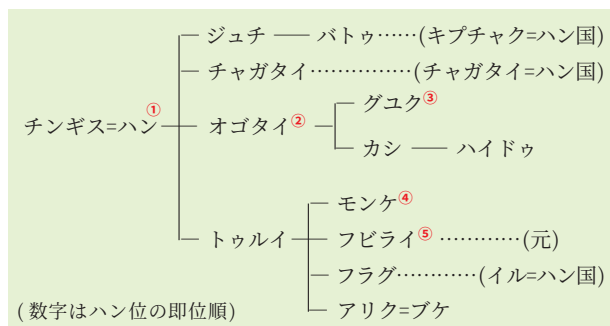
モンケの死後、トゥルイ家のフビライとアリク=ブケとの間で大ハン位をめぐる抗争が起こると、チャガタイ家・オゴタイ家は復活の絶好の機会ととらえた。オゴタイ家のハイドゥはアリク=ブケ派に立ったが、チャガタイ家の復興を果たしフビライ派に立つチャガタイの孫アルグの目が光り迂闊な行動はできなかった。1266年にそのアルグが死去するとハイドゥは、ついに立ち上がった。いわゆる「ハイドゥの乱」(1266~1301)である。ハイドゥは、後、1282/3年頃、「ハイドゥの国」と呼ばれる中央アジア最初の独立したモンゴル国家を形成する。その配下には、オゴタイ家の諸王、ドゥア率いるチャガタイ家、フビライ政権を離脱した先帝モンケ及びアリク=ブケの諸王子より構成されていた。また、オゴタイ家内部の有力な家系の中には元側につく者もあってオゴタイ家は一枚岩ではなかったこともあり、これを「オゴタイ=ハン国」と呼ぶには無理がある。

1301年、ハイドゥの死後、ハイドゥの支配下にあったチャガタイ家のドゥアが、ハイドゥ家の内部分裂を画策した。次いでドゥアは元の成宗テムル=ハンに使節を送って臣従の意を表明し、1304年、元、イル=ハン国、チャガタイ家及びオゴタイ家の間に講和が達成され、元は大ハンの名目的な宗主のもとでのモンゴル各王家の事実上の自立が確認された(加藤和秀「『モンゴル帝国』と『チャガタイ・ハーン国』の成立」『アジアの歴史と文化8』所収、同朋舎、1999)。

最初に述べたように、教科書では、徐々に研究成果が反映されてきており、近い将来、「ハン国」という表記も消えていくと思われる。また、モンゴル帝国も中国史の流れの中ではなく、中央ユーラシア史の中で扱われていくことになるだろう。次期課程ではさらなる研究成果に沿った教科書の記述が望まれる。

【参考】『月刊しにか 特集モンゴルの衝撃』(2001年11月号、大修館書店、2001)、杉山正明『モンゴル帝国と大元ウルス』(京都大学学術出版会、2004)

◆モンゴル帝国の系図



2008 年アメリカ大統領選挙スタート

●大統領を選ぶ長いレース

アメリカの新しい大統領を決める選挙が2008年1月から始まった。大統領の任期は4年で、現職の共和党のブッシュ(第43代)は、2000年の大統領選で民主党のゴアを破って初当選し、2004年には民主党のケリーをくだして再選を果たした。1951年の憲法修正第22条により3選が禁じられているため、今回の選挙はブッシュの後任を決めることになる。

大統領に立候補するには、アメリカ人として生まれ、14年以上アメリカに住んでいて、満35歳以上であることが条件となる(右下資料参照)。この条件を満たしていれば誰でも立候補できるが、通常は二大政党(共和党・民主党)のうちから選ばれる。大統領候補になるには、まず党の中で立候補を表明し、同じ党の他の候補との選挙を勝ち抜く必要がある。それぞれの党は、全米で50ある州ごとに、予備選や党員集会を行い、夏の全国党大会で最終的に党の候補者を決定する。党の候補に選ばれると、その後は、各党の候補と選挙戦を戦い、その勝者が大統領になることができる。

＊2004年大統領選の結果や、大統領選のしくみ、過去の選挙結果については、[地歴最新資料第2号・特集「アメリカ大統領選挙」](#)を参照。

◆大統領選のスケジュール

(日付は現地時間、共＝共和党、民＝民主党)

2008年1月3日	アイオワ州党員集会(民・共)
1月8日	ニューハンプシャー州予備選(民・共)
1月19日	ネバダ州党員集会(民・共)
	サウスカロライナ州予備選(共)
1月26日	サウスカロライナ州予備選(民)
1月29日	フロリダ州予備選(民・共)
2月5日	スーパーチューズデー(民・共)
	カリフォルニア州など20以上の州で予備選・党員集会
8月25日	民主党大会(～28日、コロラド州デンバー)
9月1日	共和党大会(～4日、ミネソタ州セントポール)
9月26日	第1回テレビ討論(ミシシッピ州)
10月7日	第2回テレビ討論(テネシー州)
10月15日	第3回テレビ討論(ニューヨーク州)
11月4日	大統領選投票日
2009年1月20日	新大統領就任式

●序盤戦の状況

全米に先駆けて、2008年1月3日にアイオワ州で、同8日にニューハンプシャー州で共和・民主両党の党員集会・予備選が行われた。民主党では、アメリカ初の女性大統領を目指すヒラリー＝クリントン上院議員(第42代大統領夫人)、黒人初の大統領を目指すオバマ上院議員の両候補が有力視されており、アイオワではオバマ、ニューハンプシャーではクリントンが制した。共和党では、マケイン上院議員、ハッカビー前アーカンソー州知事、ロムニー前マサチューセッツ州知事、ジュリアーニ前ニューヨーク市長らが混戦を繰り広げ、アイオワではハッカビー、ニューハンプシャーではマケインが勝利を収めた。

◆おもな候補者

民主党 ○は順位、数字は得票率(%)

() は年齢	アイオワ	ニューハンプシャー
オバマ(46)	①38	②37
エドワーズ(54)	②30	③17
クリントン(60)	③29	①39
リチャードソン(60)	④2	④5 撤退表明

共和党

ハッカビー(52)	①34	③11
ロムニー(60)	②25	②32
トンプソン(64)	③13	⑥1
マケイン(71)	④13	①37
ポール(72)	⑤10	⑤8
ジュリアーニ(63)	⑥4	④9

今回の2州の党員集会・予備選の勝者は、今後の候補指名選びで大きな勢いをつけることになるが、まだ序盤戦であり、今後、どのような展開になるか予測はできない。しかし、アメリカ国民の間には、2期続いたブッシュ政権の現状に対する政治的・経済的な不満が高まっていることは確かである。アメリカ国民がこの長いレースをとおして、どのようなリーダーを選ぶのか、今後の行方が注目される(2008年1月12日現在)。

アメリカ合衆国憲法

第二条 〔行政府〕

第一節 (五)何人も、出生による合衆国市民あるいはこの憲法確定時に合衆国市民でなければ、大統領となることはできない。三十五歳に達しない者、また十四年以上合衆国の住民でない者は、大統領となることはできない。

混乱が続くパキスタン

●ムシャラフ大統領再選をめぐる混乱

2007年10月6日、パキスタン大統領選挙の投開票が行われ、現職のムシャラフが圧勝した。しかし、ムシャラフが軍トップの陸軍参謀長を兼任したまま立候補したことを違憲とする訴えがなされ、最高裁で審理が行われることとなった。自身に不利な判決が出る見通しが強まると、ムシャラフは、11月3日に非常事態を宣言して憲法を停止し、チャウダリー最高裁長官をはじめとして、彼に批判的な判事を多数解任して、政府寄りの判事で最高裁を固めた。22日、最高裁は訴えを棄却し、24日、正式にムシャラフの再選が決定した。28日、ムシャラフは陸軍参謀長を辞任し、翌29日、文民として大統領二期目の就任宣誓を行った。これにより、ムシャラフが政権を掌握した1999年の軍事クーデタから8年続いた軍政は、形式上終了した。

12月15日、ムシャラフ大統領は非常事態宣言を解除し、各政党は2008年1月8日に予定されていた総選挙に向けて運動を本格化した。選挙戦では、政権の弱体化を避けたいムシャラフ大統領と、共に亡命生活を終えて帰国し、有力野党を率いるブットー元首相とシャリフ元首相の三者の動きが注目されていた。

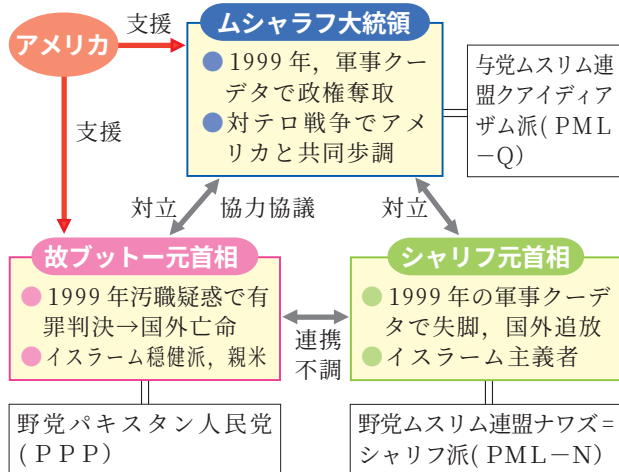
●ブットー元首相の暗殺

12月27日、首都イスラマバード近郊のラワルピンディで選挙運動中のブットー元首相が暗殺された。ブットーはイスラーム圏初の女性首相。1999年に汚職疑惑で有罪判決を受け、国外に亡命していたが、2007年10月、8年半ぶりに帰国し、アメリカの後押しを受けてムシャラフとの協力協定を行っていた。親米のブットー暗殺の背景にはイスラーム過激派の存在があるとも言われているが、真相は不明である。事件後の混乱を受けて、パキスタン総選挙は2月18日に延期された。イスラーム圏唯一の核保有国であるパキスタンの動向は世界各国から注目されている。

◆パキスタンの最近の動き(2007年)

3月9日	ムシャラフ、チャウダリー最高裁長官を停職処分
7月10日	イスラマバードで、イスラーム神学生らがろう城したモスクに治安部隊が突入(翌日、制圧)
20日	最高裁大法廷、チャウダリー最高裁長官の職務復帰を命じる判決
9月10日	国外追放のシャリフ元首相帰国、直後に再追放
10月6日	大統領選挙でムシャラフ圧勝
18日	国外亡命のブットー元首相帰国。同日、ブットーを狙った自爆テロ
11月3日	ムシャラフ大統領、非常事態宣言
9日	政府、ブットーを自宅軟禁(同夜、軟禁解除)
13日	政府、ブットーを二度目の自宅軟禁(16日解除)
25日	シャリフが再帰国
28日	ムシャラフ、陸軍参謀長を辞任
29日	ムシャラフ、大統領二期目就任
12月15日	非常事態宣言解除
27日	ブットー、暗殺される

◆パキスタンの政治勢力図



解説⑥～⑦に関連するホームページのURL

外務省－各国地域情報◆<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/index.html>

各国の基礎データや最近の情勢、日本との関係などについての情報を掲載。

在日米国大使館◆<http://japan.usembassy.gov/tj-main.html>

アメリカの政策関連文書を見ることができる。2008年大統領選挙についての特集も掲載(予定)。

ロングステイの紹介と現状

埼玉県立所沢高等学校：渡辺 美久 教諭

1 はじめに

我が国は、世界的に、史上稀に見るスピードで、急速に高齢化社会を迎えている。健康保険や年金が、はたして将来にわたって、現在と同様に維持できるのか不安な人が多数存在し、社会問題化している。マスコミも、年金制度が破綻すると、しばしば報じている。国民は、老後の備えを国に頼らず、自力で工夫することを考えている。このような状況下で、老後への自衛策の一つとして、老後を物価の安い海外で過ごすロングステイが注目を集めている。我々が認識している以上に、海外で老後を過ごすロングステイヤーは多数存在する。

これから老後を迎える人々は、バブル経済時代に、海外旅行を身近なものと感じる様々な経験をした世代である。これからの世代が、老後を過ごす先を選択する場合に、これまでの世代とは異なり、快適に生活するという要素を重視していく。国内ばかりでなく、海外の多くの選択肢の中から、安価に、さらに快適に老後を送る滞在先を選んでいくようになっているのである。

筆者は間もなく50歳を迎える。最近、老後を真剣に考えるようになった。たまたま親しい友人が医療関係者であることで、高齢者医療に関する話を聞く機会が多いことも、ロングステイに興味を抱くようになった一因であろう。この夏休みに、ロングステイに詳しい、内閣府のT氏と、ロングステイ関係の仕事に従事するK氏にお話を伺う機会を得た。その際、御教授頂いたことをも含めて以下、ロングステイの現状を紹介する。

また、2006年末にバンコクを訪問し、バンコクの医療水準の高いことを知った。9.11テロ以来、それまではアメリカに治療に行っていたアラブの富裕層が、バンコクをはじめとする大手の病院を利用するようになったことが、タイの医療水準をさらにレベルアップさせたとのことである。スポーツ選手のメディカルチェックや、角膜にレーザー照射し視力を回復させるような、高度な医療が実施されているそうである。医療を安心して受けられる体制が整っていることが求められる、高齢者の受け入れ環境が整備されている実体を知ったことで、日本人のロングステイ先として、とりわけタイの人气が高まっているということを理解できるようになった。

2 ロングステイとは

ロングステイとは何か。その定義は、①2週間以上の長期滞在であること。旅行と移住・永住の中間的存在である。②宿泊は、ホテルではなく、一戸建てやマンションなどの住まいを保有するか、賃貸契約する。③滞在目的はビジネス、留学ではなく、余暇を目的とし、現地との交流活動等をする。従って、保有する住宅は投資目的ではない。④観光旅行ではなく、海外で普段の生活をするのである。⑤移住とは異なり、生活資金の源泉は日本に残っている。以上が、ロングステイの一般的な定義である。

欧米では以前から、老後を温暖な気候の、景観の優れた地域で過ごすことは一般的であった。しかし、かつての日本人にとってのロングステイは、海外駐在経験者、芸術家、学者などの、退職する前の現役時代に海外生活をした一部の人々だけの特殊なものであった。それが今日、ロングステイが多く日本人高齢者に広まっている。普通の日本人高齢者が、夫婦での老後を過ごす場所として、海外を選択するようになっているのである。もちろんロングステイは、高齢者だけでなく、子連れ家族、若者などにも広がっている。ヨーロッパでは、バカンスをロングステイの形態で過ごすことが一般的である。しかし、ヨーロッパに比べると、長期休暇を取得することが困難な日本では、現役世代ではロングステイを楽しむことは無理である。したがって日本では、時間的に余裕のある、リタイアした高齢者に、ロングステイが顕著にみられるようになっているのである。

最近のロングステイの傾向を簡単にまとめると、第一は、大衆化、一般化である。海外駐在経験者、芸術家、学者などの、退職する前の現役時代に海外生活をした一部の人だけでなく、普通のサラリーマン夫婦がロングステイヤーになっている。

二つ目の傾向としては、目的、形態の多様化である。一般大衆が、異文化交流、避寒避暑、年金での優雅な生活などの様々な目的で、居住地以外の地域に長期的に滞在するのである。半永住するタイプや、同じ所に定期的に行くタイプ、旅行感覚で滞在先として様々な地域を選択するタイプなど、様々な形態で自由にステイする傾向がみられる。

三つ目の傾向は、国内でも田舎暮らしが広がりをみせているように、生活費が安く、静かな環境でのんびりと老後

を送れる地域を、滞在先として選択する人々が増加していることである。ロングステイの海外滞在先としては、欧米英語圏から東南アジアへの傾向がみられるとのことである。以前は英語圏で治安も気候も良い地域であるオーストラリアやニュージーランド、ハワイなどが主だった。しかし、生活費が安く、日本から近く、暖かい東南アジア諸国に中心が移っている。最近の傾向は「安・近・暖の地域」であるという。

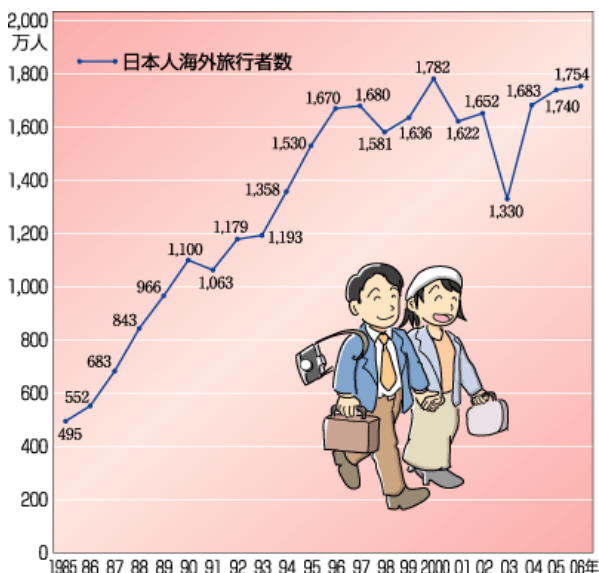
3 統計からみた、日本の高齢化の現状と出国者数の変遷

日本の高齢者人口は、総務省の統計によると2006年10月現在、60歳以上が27.2%であり、65歳以上でも20%を超えており、今後も増加傾向は続く。厚生労働省の統計によると、2006年における日本人の平均寿命は、男性79.00歳、女性85.81歳であり、数字の上からも高齢化社会に突入していることが確認できる。グラフ①より海外旅行者が増加している様子がわかる。バブル経済期を超えたそうである。

表②から、外国人を除いた出国者数は16,769,342人である。法務省の統計によると60歳以上の高齢者の出国者割合は16.2%であり、多数の高齢者が海外に出かけていることがわかる。残念ながら、ロングステイに関する統計がないため、この中のどのくらいをロングステイヤーが占めるのかはわからない。

埼玉、千葉、東京、神奈川、愛知、大阪、兵庫の出国者数(上位7都府県)の日本の総人口に占める割合は約43%であるが、出国者数の割合は60.7%にも達している。これらの地域は、所得水準が高いことが背景にあるものと推測される。おそらく、大都市は所得も高く、家賃や食費などの生活費も高いことから、他の地域よりも、ロングステイヤーの率も高くなるものと推測される。

①日本人海外旅行者の推移(『観光白書』2007年版)



4 ロングステイ先として注目を集めるタイ

海外で老後を過ごすロングステイ先としては、ハワイ、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、アメリカ合衆国本土、中国、東南アジア諸国などがあげられる。それらの中で、近年、東南アジア諸国が最も人気があるロングステイ先になっているという。東南アジア諸国の中でも、マレーシアとタイが多くの人々の支持を集めているという。マレーシアのキャメロンハイランドは、松本清張の小説『熱い絹』の舞台になった、イギリス植民地時代からの高原保養地である。カリマンタン島のコタキナバルも人気がある。マレーシアと並んで人気があるのがタイであり、タイをロングステイ先を選ぶ人々が増加しているという。

タイの人気が高まっている背景は、タイが同じアジアの仏教国であり、食生活などが日本人の嗜好に合うことも大きな要素であろう。何よりも、東南アジア諸国は日本人にとって、身近な外国である。同様に、タイ国民にとっても日本が身近な国になっており、対日感情も良好であることがデータからも裏付けられている。2002年11月に日本の外務省が発表した「日本に関するASEAN(6カ国)世論調査」によれば、タイ人が日本を友好国とみなしている割合は89%である。また、同調査において、日本はアジアの一国としてアジアの発展のために積極的に役割を「果たしている」及び「まあまあ果たしている」との回答が69%に達している。これは、1997年7月に発生したアジア通貨危機に際しての、官民をあげての支援が評価されていることによるという。さらに、我が国とタイの間で姉妹都市提携を結んでいる市町村が3都市あること、それ以外にも多くの地方自治体による交流の事例があることなども、親しみの持てる国、好感の持てる国に日本をあげる人が多数存在する要因になっているといえよう。

日本とタイは、歴史的にみても友好関係が継続して来

②男女別、都府県別出国者数(2005年度)(法務省資料)

	男	女	総数
全 国	9,749,800	7,653,765	17,403,565
埼玉	599,975	471,939	1,071,914
千葉	615,710	476,807	1,092,517
東京	1,700,252	1,448,547	3,148,799
神奈川	1,086,794	786,006	1,872,800
愛知	647,359	511,019	1,158,378
大阪	753,769	622,336	1,376,105
兵庫	467,735	383,462	851,197
上位7都府県の合計	5,871,594	4,700,116	10,571,710
外国人	411,675	222,548	634,223
60歳以上	1,512,466	1,205,743	2,718,209

た。2007年は、日タイ修好120周年に当たり、様々な事業が実施された。その上、日本人観光客が年間130万人タイを訪問している。8万人を超える日本人社会が存在し、7,000社の日系企業が進出しているという実績がある。これらの長年にわたって培われてきた実績が、ロングステイヤーの増加の背景にあるものと考える。

ロングステイヤーの受け入れ先として選ばれるための諸条件が整っていることも、勿論大切な要因である。以前は、長期滞在に必要なビザがなかなか下りなかったが、近年は関係各位の努力により、ビザの交付が緩和されるようになった。ロングステイ受け入れの最大の障壁が取り除かれたのである。

タイは、食事・人情・安全・医療介護環境・生活費・文化・自然環境・趣味・スポーツなどで日本人ロングステイヤーにとっては最適の国であると評価されているが、海外で、快適で健全なロングステイライフを実現するには、各ステイヤーの注意も必要である。各自が、ロングステイの明確な目的を持ち、情報収集、事前準備をしっかりとすることが不可欠である。楽しいステイを行うためには、現地社会との融和、生活ネットワークの構築などにも必要である。滞在先のホテルやアパートに閉じこもっては、楽しくないだろう。現地の人々や、日本人ステイヤーとの交流を通して、楽しみや、様々な情報を得ることができるのである。こういった努力を怠ると、せっかくのロングステイが台無しになってしまう。日本国内でも、高齢者を狙った「振り込め詐欺」に代表される犯罪が頻発している。海外でも同様で、裕福で力の弱い高齢者を狙う犯罪者の格好の標的になってしまう。これらの危険から身を守るためにも、ネットワークを構築し、情報交換をすることが大切である。ロングステイを支援する政府系諸機関やNPOなどを利用することも大切である。

タイのロングステイ(滞在)先の代表的な都市を紹介する(地図③)。最も便利なバンコク市内は、ホテル、サービスアパート、コンドミニウム、医療施設など最高級なものから一般的なものまでカバーしている。日常の生活に必要な食料、外食、買物などほとんど日本と変わらない生活が可能であり、日本語が通じる所も多数ある。バンコク郊外は、市内に比べて、ホテル等の費用がかなり安く抑えられる。しかし、自家用車以外の交通の便は良くない。

日本人ロングステイヤーが多いチェンマイは、年間を通じて比較的涼しく、物価も安く、医療も充実している。ビーチリゾートとして発展したパタヤ、その先のトロピカルフルーツの宝庫であるラヨーンは、バンコクから高速道路で約2時間と便利であり、ゴルフ場などの施設も充実している。ホアヒンはタイランド湾に面した静かな保養地で、歴代のタイ国王の別荘があり、格式高いリゾート地で

③タイのロングステイの代表的な都市



ある。欧米の旅行者や長期滞在者が多く、日本人訪問者は多くないが、静かで快適なリゾート地である。従って、滞在費は高くなる。その他、映画「戦場に架ける橋」で有名なカンチャナブリ、「南海の真珠」と呼ばれているプーケットもロングステイ先として人気を集めている。